

卒業生に贈る言葉

上野直蔵

これから、社会、という実に複雑な人間関係の場にのぞまれるにあたって、「精神を柔軟にしてほしい」と申し上げたいと思います。要領よく人生を遊弋（ゆうよく）せよ、と言うではありません。地上生活において、しばしば、これは、というひとつの価値観の強烈な魅力にひかれることは当然のことありますが、それに自己中心、もしくは絶対化という視点から執着するな、と申し上げたいのであります。自己が託している理念なり、信条なり、道徳観なりを基準として他人を見る時、しばしばそういう自己の基準に反している人物を、もどかしく、さらにはいきどおしく、ついには殲滅（せんめつ）の対象とまで考えがちであります。人間というものは、言行一致を意識し、その意味で、行為の論理性をどこまでも願う動物であります。同時にまた、それにもかかわらず、自己の生活が矛盾だらけであるということも十分に承知している生きものでもあるべきであります。

私はこういう精神のあり方をユーモアのセンスだと思えます。十九世紀のイギリスのユーマリストであり、エッセイストでもありましたチャールズ・ラムという人が「我、愚者

を愛す」と申しました。これはなかなか意味深長なコトバであります。おろかしい人を見るにつけても、輕蔑し、いらいらし、罵詈のひつとも投げかけた衝動にかられる時、ふと我にかえり、そういう「おろかしさ」というものを、何を隠そう自分もくつきりともちあわせている、ということの認識です。罵倒しようと思っていた相手と全く同質の愚昧さ、愚劣さを自分も抱いているということの自覚がこのラムの發言の背後にございます。そしてその自覚はさらに延びてゆきまして、人間共通の「おろかしさ」だ、ということに気がつくわけであります。さればこそ「我、愚者を愛す」であります。笑っている人が他の人のことを笑いながら、自分自身をもまた笑える洞察力と客觀性をもちあわせていれば、他者への輕蔑は、輕蔑を越えて共通の苦しい状態を認めあうことになります。

私はこれを「精神の柔軟性」だと考えております。この「精神の柔軟性」は自己や他者や現象を客觀化するのに役立ちますので、子供の無垢にも似た目で物事に驚くことを教えます。当たり前のこととして通っている世間の事象や偏見を余裕をもって見抜くことにもなるのではないでしょうか。新約聖書にこんな話がございます。レビの家でイエスが食事の席についておられたときのことです。多くの取税人や罪人たちも、イエスや弟子たちとその席に着いていたのです。パリサイ派の律法学者たちは、イエスが罪人や取税人たちと会食しているのを見て、弟子たちに言ったのです。何故君たちの師はああいふ取税人や罪人風情と食事をともにするのか。イエスはこれを聞いてこう言われたといひます。

「わたしがきたのは、義人を招くためではなく、罪人を招くためである。」（マルコによる福音書「章十五」十七）おそらく、およそ世間で人がまじいふるまいをしている者は、こういう取税人や罪人と会食することはありえない、という当時の社会の通念があったのだでしょう。ところがそれはイエスの目には異様であつたのです。そういう地上の評判からはずされた者と、どうして会食してはいけないのだろうか。どうしてそういう人たちが救いの

対象にならないのだろうか。そのことの方が異様であるのです。精神を柔軟にしていると、人生を客観的に見る姿勢があると、それが見えるわけであります。

このように考えてきますと、「精神の柔軟」さといい、「ユーモアのセンス」といい、最終的には愛の精神に到達することが分かります。人間にはいつも自分が何であるかということと、どうあらねばならないかということの間に差があることが分かっています。従って人間には誰にもいくらか偽善的なところがあります。それは誰一人外見どおりの生活をしていないからです。一人として完全に清い人がいない、とさえ言い切ってもよいくらいです。言い換えるならば、神の前には誰もが罪人である。もし自分をも含めて誰もが罪人であるのなら、他人の罪も許せるのではないだろうか。自分を許せるように他人も許せるのではないだろうか。「自分を愛するように隣り人を愛する」(『マルコによる福音書』十二章三十三) ことのできるゆえんであります。精神の柔軟さはこういう愛の精神を呼ぶのであります。

話が堅くなりましたが、ユーモアのセンスというのは、決していつもゲラゲラ笑っていることではありません。それはひとつの生活の態度であります。人生の知恵であります。所詮、生身で、有限で、罪深い人間を客観的にみつめてゆく精神の姿勢であります。そこから他人を裁かない、他人を罰しないという許しの精神が醸成されてくるのであります。だから私はそれを柔軟な精神だと申しあげました。ご存知の新島 襄の自責のムチもそういう精神構造からともと発したものであります。

己れの不完全に深くとらわれているが故にこそのとらわれない人間観察。それを精神の基底部分に据えてください。

(同志社総長)

一国を維持するは

決して二三英雄の力に非ず

松山義則

卒業生諸君。いま、同志社大学での学業を終え、社会に向かって門出されるときをむかえました。心からおよろこびを申し上げます。

諸君が童心にあふれて小学校の門をくぐられてから今日まで、人生にとても多感な時期を学校生活にすごし、その間に、体力をきたえ、知識をたくわえ、また世界と人生に対する叡智の形成につとめられました。諸君の幼少のときから現代に至る時代はまことに変動多い時期でありました。諸君をとりまく環境は高度成長の嵐にみまわれ、そこにはめまぐるしいほどの多様な価値観がひしめき、いわゆる自由化のとめどもない流れのなかで、諸君は自己のたよるべき規準、生きる基盤を求めつづけられたことと思います。しかも、この卒業の時期は、きびしい不況のときとなり、ゆたかさからきびしさへの激しい変転のなかで、諸君は社会へ門出されることとなりました。

私は諸君がいま立たされている現実を勇ましく自分の力で乗りきっていかれることを心

から願っています。聖書はつぎのように教えています。

なんじら世にありては艱難あり。されど雄々しかれ。我すでに世に勝てり。(ヨハネ伝十

六章三十三節)

また、さらに、

エホバをまち望め雄々しかれ汝の心を堅うせよ。必ずやエホバをまちのぞめ。(諸篇二十七篇十四章)

諸君が青春の時代に求められた自由をさらに追求してください。新島襄先生は同志社人に自治自立の精神を願いました。まことの自由は高度成長のなかに生まれた放縦や自己主張あるいは甘さではありません。「あしたはあしたの風がふく」といった虚無的な無責任な、そして自己破壊につながるものであってはならないと思います。また、不況下のもつ現実のきびしさが逆に諸君を無気力にし、あるいは他人をおしのけてまで利己的な競争主義に墮するとすれば、諸君の将来はあまりにも色あせたものとなるでありません。不況時代の卒業生は社会に出てから実力を発揮するといわれます。このはげしい時代に社会に出る運命をになった諸君が、いまこそ勇氣と忍耐をもって歩み出していただきたいと思っています。

新島先生は「一国を維持するは決して二三英雄の力にあらず。実に一国を組織する教養あり、智識あり、品行ある人民の力に拠らざる可からず。是等の人民は一国の良心とも謂ふ可き人々なり。而して吾人は即ち此の一国の良心とも謂ふ可き人々を養成せんと欲す。」と述べておられます。私は諸君が人生の走路を力づくよく足音たく走られるときに、この先生の言葉を思いおこしてほしいと思います。われわれは英雄たらんとするのではなく、また低次の競争に自らを消耗するのでもなく、一人の人民として、一国の良心たらんとし、人生の途をふみしめて歩みつづけてください。社会の榮譽をになった頂点に立つこと

を目標とするのではなく、社会のあらゆる場所において、地の塩、世の光になりたいと思います。

新島先生は同志社大学設立のための募金活動で東奔西走の日をおくり、四十七歳を前にしてたおれました。「平和、喜び、天国」という最後の言葉をのこしてこの世を去られました。世界も人間も、もともと競争や攻撃の宿命をになったものですが、努力して平和を現実のものとしなければなりません。不安とあせり、悲しみのなかに日をおくりがちな人間にとつて、真正の喜びを自己のものにすることは決して安易なことではありません。社会のなかで、職業人として、日々の生活の苦悩や重さがたえがたいものとなることもあるでしょう。喜びに生きる日を求めたいと思います。この平和と喜びは、先生の最後のことば「天国」を願うことによつて真実の平和、喜びとなることと思います。それぞれ個性をもち、また有限な人間が、永遠の生命をうることによつてのみ平和に生き、喜びをわがものとなしうるでしょう。

大いなる夢と理想を胸にして将来に向かって力強く歩み出してください。御健康を祈ります。

(同志社大学長)



生命にいたる門

酒 井 康

同志社における四年間の大学生活を終えて、いま新しい出発点に立たれる皆さんに、心からお祝いの言葉を申し上げたいと思います。精神的にもっとも成長の著しい時期を、この同志社の学園で過ごされた皆さんは、勉学における出会いや学生同志の交わりをとおして、自己形成の真剣な努力をされたことでしょうし、また人間の苦悩やよろこびをも、敏感に、より深く自分のものとされて、人間としての成熟の度を加えられたことと思います。

創立者新島襄が同志社教育に期待した、いわゆる「精神活力あり、真誠の自由を愛し、以て邦家に尽すべき」人物の養成が今日望ましい成果をあげているか、これは私どもが深く反省せねばならぬことと思いますが、創立百年の記念の年を迎えた同志社とともに、新しい人生の出発をなさる皆さんが、どうかもういちど、同志社精神の原点に立って、人間としての主体的な生き方を探究していただきたいと願うものです。

百年の歴史を通して、同志社が世に送った先達の生き方のなかには、生き生きとした自立

の精神をもって、権力におもねることなく、私利私欲にとらわれず、すべての人の真の幸福のために、使命感をもって身を挺して生きぬいた数多くの証しを見ることが出来ます。「生命にいたる門は狭く、その道は細い。そして、それを見いだす者が少ない。」と聖書にありますように、それは安易な道ではないかもしれません。しかし、この「人間らしく」生きる真実の道、生命にいたる門は、すべての人の前に開かれているのです。そこを歩むか、否か、その門をくぐるか、否かは、その人の自由な決断に委ねられています。

現代は人間らしく生きることの難かしい時代です。学問と教育を本領とする大学においてさえ、大衆社会化、管理社会化の波は容赦なく押しよせてきます。自由な真理探究や内面的主体性の確立が困難となり、高学歴社会の無精神性や、没個性傾向が大学へ逆輸入されるといった現象も見られます。このような挑戦に対して、大学は現代社会を醇化する精神文化の創造と伝播の役割を果たさねばなりません。また、大学において訓練された自由な批判精神と創造的知性とは、卒業されてはいられる社会のさまざまな活動場面で、職場・家庭を問わず、十分にいきいきと発揮されねばならぬと思います。

人生に試煉や苦悩はつきものですし、ときには、失敗や挫折を深刻に経験することもあります。癒し難いこころの傷痕を抱きつづけねばならぬこともあります。人間はいつまでも不完全であり、躓きやすく傷つきやすい存在です。人間が苦しみや悲しみを味わわねばならぬことは不幸なことですし、つらいことですが、しかし人間の人格的成長は、このような危機の克服によって、非連続的に、飛躍的になされるように思われます。「若いときの苦労は買ってでもせよ」という諺もありますが、ほんとうに人間の苦しみや悲しみがわかるようになるということは、人間にとって大きな賜物なのかもしれません。悲しみを知った人は人の悲しみを理解することが出来ます。病苦を知らぬ人には病人の苦悩は分かりにくいものです。愛されたことのない人に人を愛することはできないといってもよ

いでしょう。新島襄が弟子たちを愛し、任地で活躍する卒業生の牧師たちに、実に手厚い愛の配慮をつづけた、その行為の背後には、彼がキリストから賜った愛の確信があったのです。「神はそのひとり子を賜ったほどにこの世を愛して下さった。それは御子を信じる者がひとりも滅びないで、永遠の命を得るためである。」というヨハネ福音書三章一六節のみことばは、彼の生涯を通じて堅持された確信でした。「まことに彼はわれわれの病を負い、われわれの悲しみをになった。」と予言者イザヤが語ることはイエス・キリストの十字架の愛を象徴していますが、それはまた新島の遺志を嗣いで教育や社会事業に献身した人々をも生かし動かしめる力でありました。新島襄の葬送の際、熊本の大江義塾から贈られた旗には、「彼等は世より取らんとす、吾等は世に与へんと欲す」と大書されていたとききます。自己中心的な我利追求や個人生活の充足のみに汲々たる生き方の支配する今日、神を愛し、人を愛し、世に仕えるキリスト教の精神は、同志社人が世に問うべき人間解放の原動力ではないでしょうか。皆さんの輝かしい前途に神の祝福を祈ってやみません。

(同志社女子大学長)

